

口湖、同11月7日鳥屋野潟というふうに同一行動をとり、春の北上途上にもウトナイ湖、クッチャロ湖というふうに同一行動が見られた。ところが、残るもう1羽の兄弟鳥である14Cは、どうしたわけか11月7日に伊豆沼に現われ、同9日には阿武隈川というように太平洋を南下していたのである。そして昨春、親鳥とともに帰北していった4羽のうちの1羽の9Cは、今シーズン11月19日忽然と中海（島根県）に現われたのである。

もう一つのB群はどうなったか。B群のうちの1羽ははじめから不明だったが、その他の4羽は親鳥とともにクッチャロ湖、八郎潟、鳥屋野潟というふうにほぼA群と同じような経過をとって南下していた。しかし77年2月に入るとこの兄弟鳥の行動が少しずつ違ってきた。3Cは行方不明、7Cと8Cの2羽は2月下旬、阿賀野川下流で死体となって発見された。もう1羽の13Cは77年1月9日に佐潟に現われ、同3月中は鳥屋野潟の後背地である亀田郷の水田に約200羽のコハクチョウとともにエサをあさっているのが見られた。この13Cは、今シーズンは全くコースを変え、10月30日に太平洋側の屋騎沼（下北半島）に現われ、同12月15日には阿武隈川（福島市内）に現われたのである。

この結果を要約すると、幼鳥が親から独立する「子分れ」の時季は意外に早いこと。兄弟鳥は1年後には、行方不明を含め60%が淘汰される。前シーズンと同じコースで渡来するものは10%。との40%はすべて別のコースで南下するということである。

このことは、野生の白鳥の生きざまとしての、一面の強靭さを証明しているように思う。

## お尋ねします？「コハクチョウ」という名について

大森常三郎

日本名「コハクチョウ」というものゝ文献・資料をみているうちに、いろんな事、理解しがたいことが含まれているので、次のことを記しました。

Whistling swan (C. columbianus) を亜基種として

C. C. bewickii (Yarrell) ..... コーロッパ種?

C. C. yankowskii (Alpheraky) ..... アジア種?

C. C. columbianus アメリカコハクチョウ

と迄は判ってきたが

また、高野伸二先生はコハクチョウをWhistling Swanとされており、清棲先生の著書には Eastern Bewick's Swanとあり「C. bewickii jankowskii Alpheraky」となると混沌としてくる。このWhistling swanは通常アメリカコハクチョウを指しているものと思っている。IWRBの調査カードにもピータースコット卿の「The Swans」の中でも Bewick's と Whistling を明らかに区別されている。

アラスカの渡り鳥のパンフレット「Alaska's Migratory bird」では Whistling swan (アメリカコハクチョウ) を写真でみることができる。しかし、コハクチョウの歐州種、アジア種になると

また問題が含まれている Bewick's Yankowski's を区別する定義がないことである。前記の「The swans」の中では Bewick's で全編を通じているが、同氏の Bird of Britain and Eupop の中では Bewick's と Yankowski's を明確に図示し、区別されている。

IWRB の調査表のうち分布図には Bewick's swans C. c. bewicki's とあるも Jankowski's は載っていない。一体 Jakowski's swan とは何だろうと不審感が深くなる。

以上、偶感的なことを拉例したが、要約すると

1. コハクチョウを英語で書くとき Whistling swan とするとアメリカコハクチョウと紛らわしい状態になる。学名を付記しなくともよい名がありませんか？
2. Bewicki と Yakowski の特徴とみわけかたについて、何か文献、資料はありませんか。或いは同一亜種の異語か？ 明確にできませんか？

## 中海干拓の進行と白鳥の行方

岩田正俊

中海干拓も進行し、揖屋工区と島田工区とは、すでに昨51年において〆切られ、海水表面積は順次減少して僅かに水溝を残すのみとなった。

中海の白鳥は、特に意東白鳥海岸に集ってくるのは年々その数を増加し、51～52年季には、その数500羽を越す日が多くなった。この現象は種々の原因もあるが、石川県の河北潟では干拓の進行と共に、その数を年々減じつつあるのと、何等かの因果関係のあることは否むことはできない。

中海においては、干拓の進行と共に白鳥のねぐらを奪われることを杞憂し、49年島根県においては、時の環境保健部長と、自然保護課長の名コンビにより、「中海地区水鳥保護対策調査専門委員会」を設置して、その対策を数回協議開催したが、この計画は一向に進まず、その上担当の鳥獣保護の責任にある課長、係長は転任し、新任の担当課長は全くこの方面には、関係も、知識もない一行政官吏に過ぎず、在任中先進地視察と称して、某鳥獣保護員を従者として同行し、その結果「将来の学術的研究を待つ」と称して、お茶を濁しているうちに他に栄任して去り、自然保護課も運命を共にして消えた。（後進県を標ぼうしている島根県にはあり得べきことだ。）

一方、「白鳥はもともと宍道湖にいたものだ、中海に住めなくなれば、それを幸に宍道湖にもどってくる。それまで手をこまぬいて待てばよいではないか」との説を称える人もいる。

そもそも中海の白鳥は、宍道湖が不適で中海に移ったと考えている人もいるが、中海の数百羽という大群（52年にはコハクチョウは日本では最多数となった）の白鳥は、決して宍道湖から移ったものでもなく、他から新に飛来したもののが大部分である。

昭和51年～52年季の門脇益市さんの、中海の白鳥観察記をよく見ると分るように、意東白鳥海岸の白鳥は、52年1月末から2月初旬にかけて、その飛来数が580余羽となっている。

そして心配された夜のねぐらは、白鳥海岸の波浪のはげしい日には、急ぎ揖屋工区や島田工区の残水